

実例から家具カタログ、DIYまで! ふたり暮らしのインテリア

EDECOR

2014
デザイン界の
流行予測

エル・デコ
2月号 FEBRUARY 2014

35m²の空間にあう、
コンパクトな家具図鑑



クリエイティブがあれば楽しい!

ふたり暮らしの部屋

“遊び”の感覚に満ちた、
2階フロアのアトリエ

右ページ 2層合わせて広さは約300㎡、木の柱と白い壁のコントラストが清々しい。家具やドローイングなど空間のそこから、彼らのクリエイションが顔を覗かせ、実に楽しい雰囲気に充ちている。ロフトにはスタッフがデザインしたe15などのチェアたちが賑やかに並ぶ。

白いロフトで優雅に戯れる、
モダンとエスニック

左ページ 木材の保管場所だったロフトは、その豊かな天井高を生かした心地よいワークスペースへと変化した。スタッフが祖父から譲り受けたという、北アフリカのカーペットの上には、彼がデザインしたMoroso社のテーブル「BENT」が、アフリカの工芸とイタリアンモダンが、ミュンヘンで幸せな出会いを果たした。





Stefan Diez

ステファン・ディーツ

Saskia Diez

サスキア・ディーツ

ステファンは、コンスタンティン・ブルツのアシスタントなどを務めた後、2003年に自身のスタジオを設立。Moroso、Thonet、Rosenthalなどのクライアントをもと、数々の国際デザイン賞を受賞。サスキアはジュエリーデザイナーであると同時に書本の企画なども手がける。現在進行中の中国のショールームプロジェクトは夫との共同作業だ。

<http://www.stefan-diez.com/>

<http://www.saskia-diez.com>

Stefan & Saskia

ステファン&サスキア・ディーツの、 楽しき創作現場へようこそ!

世界が注目するデザイナーカップル、ステファン&サスキア・ディーツ夫妻。

彼らが実践する理想的なSOHOとは? ミュンヘンにあるおしゃれなスタジオを訪ねた。

Photos PATRICIA PARINEJAD Original Text TINA SCHNEIDER Text ASAKI ABUMI





カラフルな家具と緑で、
緩やかにゾーニング

この空間の主役のひとつがこの卓球台。ふたりでよく向かい合ってゲームを楽しむとのこと。ちなみに大工としての腕も磨かせるステファンは、ベニヤ板とメッシュフェンスを用いてオリジナリティ溢れるロフトの手すりを造作。緩やかに存在する手すりのおかげで、階層は遠くとも同じ空間にいる感覚で、1階とロフトはやりとりできる。このS.O.H.O.には、まるで体育館でありながら暖かな、自由な空気が流れている。



たっぷり光を取り込んだ、
外と繋がるリビングエリア

「窓からは鳥の鳴き声や子どもたちの
笑い声と同時に、このグロッケンパルク
という街のざわめきも聞こえてくるわ。こ
こは都市の中心でありながら、田舎らし
さも体感することができるのよ」とサス
キアは語る。ブルーのソファは、ステフ
ファンがデザインしたガンディアプラスの
「TROPÉZ」。灰色のチェアはa15の
「This That Other」。







自らの作品に囲まれた、 活気のあるワークエリア

上 ロフトスタジオに設けられたスタジオファンのワークスペース。デスクの上にはプロタイプや模型が散置しと並び、進行中のプロジェクトの多くを管理している。背景にあるページのラウンジエリアはスタジオファンがデザインしたe15社「Eugene」。左手の棚棚はHOMERの「Hope Stick」。

互いのクリエイションを、 加速させる“理想の家”。

右ページ 自らの作品スペースの一角にて、スタジオファンがデザインした家具に囲まれて、お互いにおしゃべりするふたり。制作について話し始めると、エンブレムを背景に、ここはふたりにとって理想的な仕事場かつ実験ラボであり、また愛の家でもあるのだ。サスキアの後ろに見える白いイスは、Schellmann Furnitureの「TUNE」。

「子どもたちが登場して、夫のアシスタントが活動するまでの部分が、私たちにとってかけがえのない時間なの。静けさに包まれたスタジオをふたりと歩き回って、植物に囲まれたカウチにまたれかかる。扉を開きめくりながら、深呼吸をする。時には雨が降り始めて、ガラス屋根の上から滴り落ちる水の音を聞く。そうしていると、日々の慌た

ドイツ・ミュンヘン南西部の町、グロッテンバッハ。クリエイターたちが好んで住む活気のあるこの町に、家具デザイナーであるスタジオファン・ディーツ、ジュエリーデザイナーのサスキアのスタジオがある。そこには私たちの想像を超えた、伸びやかで自由な空間が広がっていた。

仕事と家庭をバランスする、 ワークスペースの作りかた。

300平方メートルのこの物件との出会いは偶然。ふたりで自ら仕上げとデコレーションを手がけ、内部にはショールームも設置した。白く広大な空間は仕切り壁のないオープンな構成となっている。木の柱が高い天井を支え、色鮮やかなデザインチェアと観葉植物が並び、そして中央には大剣卓球台が置かれている。彼らがここで過ごす時間のなかでも、特にお気に入りなのが朝8時からの1時間だという。

「過去に未開の領域はすでになく、歴史は設計に織り込み済みなのです」と語るスタジオファンは、作を振り返るよりも、理想の形へとプロジェクトを進めさせることに興味があるのだ。

インスピレーションの源泉でありながら、家族やスタッフとのコミュニケーションの場でもある広い空間では、互いにどこからでも声を掛け合って交流することが出来る。毎朝の半分や卓球を楽しむときも、それらはすべて創作活動に不可欠なプロセスだ。

無駄でありながら、愛情にも溢れた、美しいスタジオ空間。「私たちは夢のなかに住んでいるの」とサスキアは微笑んだ。

だしさがリセットされるの。一日をスタートさせるまでの、静かな儀式」とサスキアは語る。

ふたりが、進化し続ける空間」と表現するこのスタジオ。ロフトは明るく開放的に溢れ、新しいデザインのヒントを得るための柔軟なラボとして機能することにも成りが置かれている。子どもたちが家具の模型箱などで遊ぶなどしている様子を見て、新作のアイデアを得ることもあるという。そしてここにはカウチでもソファでも作品が溢れているが、デザインチェアな家具はほとんど見当たらない（ロフトに置かれた祖父から譲り受けた絨毯を除いては）。